

日本ロシア文学会 関西支部 会報

発行 日本ロシア文学会関西支部事務局
 住所 〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
 京都大学大学院 人間・環境学研究科 ロシア語部会 気付
 電話 075-753-6533 Email hattori.vieuxslave@gmail.com
 郵便振替口座 00960-2-48831 日本ロシア文学会関西支部

ご挨拶

中村唯史

2017年秋から務めてまいりました支部長の任を、2021年秋までの後2年継続することになりました。2年前のご挨拶で「日本ロシア文学会とは、関心や対象や手法を異にする個々の会員が、学問的な手続きに則り、相互に敬意を保ちつつ、対等な立場で自由に自説を述べ、議論を交わし、情報を交換する場であると考えます。支部長の仕事は、理事や運営委員や事務局の方々とともに、そのような場を確保し、活性化を図ることに尽きると思いますが、その考えは今も変わっておりません。これまでと同様、理事、運営委員、事務局の方々のご助力を得て、何とか任をこなしていきたいと思っております。支部会員の皆様のご協力を、心よりお願い申し上げます。

春季総会・研究発表会の報告

2019年6月15日(土)、関西大学(千里山キャンパス)において関西支部の春季研究発表会ならびに総会が開催されました。

◇研究発表会

(1)発表者:占部 歩 氏

題目:ヴィクトル・ペレーヴイン『帝国 V』におけるナポレオンと馬車のメタファーについて —葛藤と劣等感によるアイデンティティ形成—

司会:中村 唯史 氏

(2)発表者:松下 隆志 氏

題目:ティムール・ノヴィコフと現代ペテルブルグ文化

司会:ヨコタ村上 孝之 氏

(3)発表者:北井 聡子 氏

題目:『白痴』における〈斬首の光景〉

司会:大平 陽一 氏

◇支部総会

1. 会員の異動(敬称略)

・入会:松原繁生(京都大学大学院 博士後期課程、
推薦:中村唯史、服部文昭)

・支部変更:北井聡子(大阪大学言語文化研究科、
関東支部より)

・関西支部退会者:

近藤昌夫、小川佐和子、デボフスキー、アレクサンドル、
山口涼子

2. 2019年9月からの支部長ならびに理事候補の選挙結果

①四名の理事候補について(敬称略)

中村唯史(21票)、ヨコタ村上孝之(19票)、藤原潤子(11票)の三氏を理事候補とする。四人目の理事候補は、8票で同点の大平陽一、小田桐奈美、横井幸子から抽選で一名を決定する。

②上記の抽選に際し、大平氏は規定に基づき辞退された。それゆえ、小田桐奈美、横井幸子両氏の

抽選とする。当選者を理事候補とし、次点者は、任期中に欠員が生じた場合の候補とする。

③総会会場における選挙管理委員立ち合いの抽選の結果、横井幸子氏が当選。小田桐奈美氏が次点となった。

3. 2019年9月からの支部役員・・・支部長提案の通り異議無く承認された

支部長: 中村唯史

運営委員: 中村唯史、ヨコタ村上孝之、藤原潤子、

横井幸子、服部文昭 + 「編集委員」*

* (全国組織の) 日本ロシア文学会から選定された編集委員の中に関西支部会員が含まれていた場合、その人に支部の運営委員に就任してもらう (日本ロシア文学会における編集委員の選出方法の変更に伴う支部規定の運用)

事務局長: 服部文昭

監事: 大平陽一、有宗昌子

4. 次期開催校の決定・・・天理大学にて、12月7日(土)に開催と決定された。なお、2020年の春季総会・研究発表会は、神戸市外国語大学にて開催される。

5. 日本ロシア文学会の報告(全国大会、理事会など)・・・支部長から

・日本ロシア文学会の次回定例総会・研究発表会は、早稲田大学戸山キャンパスで開催される。

・日本ロシア文学会の財政状況の説明があり、会費納入率の一層の高まりが期待される。

6. その他・・・以下のような趣旨の発言があった。

・日本ロシア文学会でも各支部においても、現在、修士課程の院生の入会が少ない状況である。今後は、修士課程の院生の学会加入を積極的に勧誘してはどうだろうか。

・このところ、支部の総会・研究発表会は、6月第2土曜日と12月第1土曜日の開催が多いが、授業によって参加できない会員・会友も少なくないのが現状である。何か良い打開策を探れないだろうか。

7月21日全国理事会報告

7月21日(日)に東京大学本郷キャンパスで開催された日本ロシア文学会理事会につき、関西支部会員に関連する事項をご報告申し上げます。

1. 今年度の日本ロシア文学会全国大会は、10月26日(土)・27日(日)の両日、早稲田大学国際会議場で実施されます。25日(金)夕方には、プレシンプも開催される見込みです。最終的なプログラムは、9月に学会ホームページ、および同月郵送予定の大会資料集に掲載されますので、ご確認のうえ、ぜひご参加ください。

なお、全国大会に合わせて開催される総会(10月26日午後)では、各種委員会の改組も審議される予定です。

2. 今年度の日本ロシア文学会大賞受賞者は、本支部の佐藤昭裕先生(京都大学名誉教授)に決定しました。学会のサイトに授賞理由と受賞の言葉が掲載される予定ですので、ご覧ください。また上記の全国大会の一環として、10月26日(土)の午後、佐藤先生が受賞記念講演をされる予定です。

3. 今年度の日本ロシア文学会賞は、本支部の北井聡子さん(大阪大)の「ファルスを持つ女: 長篇小説『セメント』のダーシャについて」と、青山忠申さん(京都大院)の「『アヴァクム自伝』自筆稿のアクセントに見られる規範と逸脱」の2論考(いずれも『ロシア語ロシア文学研究』第50号所収)に決定しました。まもなく学会のサイトに授賞理由と受賞の言葉が掲載されますので、ご覧ください。

4. 日本ロシア文学会では、会員は、勤務地ないし自宅のある地域の支部に所属することになっています。転居や転勤等に伴う支部の移籍を円滑に行うため、移籍については、全国事務局への連絡をお願いしたいとのことです。今後、学会報などで呼びかけがあるかと思いますが、ご留意ください。

5. 今後、学会費を滞納されている方は、種々の助成制度の対象外となります。日本ロシア文学会の円滑

な活動のため、学会費の納入をぜひお願いいたします。

・支部事務局からのお願い

円滑な支部運営のために、どうぞ、会費の納入もよろしくお願いいたします。

郵便振替口座 00960-2-48831

日本ロシア文学会関西支部

*以下に、研究発表の報告要旨を掲載しています。

研究発表の報告要旨

ヴィクトル・ペレーヴイン『帝国 V』におけるナポレオンと馬車のメタファーについて —葛藤と劣等感によるアイデンティティ形成—

占部歩(大阪大学大学院生)

ヴィクトル・ペレーヴインの長編『帝国 V』(2006)における、メタファーを用いた自己イメージの表象と、アイデンティティの形成過程の関連を考察した。

具体的には、作品中に登場する「ナポレオンと、彼を運ぶ馬」というメタファーを分析し、それを受け容れられない主人公が経験する葛藤を軸に、作品中に表象されるアイデンティティの在り方とメタファーの関連について検討し、アイデンティティ形成の過程におけるその重要性について論証した。「舌」がナポレオンであり、吸血鬼が彼を運ぶ馬であるというメタファーは「主人とその乗り物」という関係性をラーマに刷り込み、自身の意識の自立性、自分という個人の尊厳に確信をもてなくしてしまう。

このメタファーは、アイデンティティという観点から考えれば自立性(一人の吸血鬼としての自己)と他立性(舌に従属する存在)の関係を表現するものといえる。他の吸血鬼たちはそれを当然のこととして受け入れ、アイデンティティの一部としているが、ラーマはそのような共生関係に納得出来ず、ある種の屈託を抱き続ける。そしてそのようにラーマが個人としての自立性にこだわることを、先達の吸血鬼は「お前は人間のように考える」とたしなめるのである。

その結果ラーマは葛藤を抱え続けるが、『帝国 V』において吸血鬼とは人間世界を裏から支配する存在として描かれている。すなわち「舌」の担い手という立場と同時に、人間に対する優生種としての自己認識をも持ち合わせる存在である。ある場合には従者、ある場合には支配者という矛盾する立場はラーマを困惑させ、拭い去ることの出来ない葛藤を植え付けると同時に、その反動として時に「自分が神となる」という極端な全能感を与えもすることになる。その結果彼は不安定な自己イメージしか形成することが出来ず、吸血鬼としての自分を素直に受け入れられない様子が全編を通して描かれる。

このような自立性と他立性の二律背反を、フランスの思想家ルネ・ジラールは「存在論的病」と呼び、中でもそれに伴う葛藤とその破滅的な帰結を「人間性の自尊心の逆説」と定義している。ジラールは「存在論的病の自然の最終段階は死である。自尊心の浪費的な力は分裂し、つぎに断片化し、そして完全な崩壊にいたることなしには無限に行使されえない。ひとつにまとまろうとする欲望は散乱し、ここにいたると最終的な散乱状態になる。自尊心は主体によって自由に選ばれたものなのだから、存在論的病の宿命的な結末はつねに、直接的であれ間接的であれ、ある形態の自殺になる」と述べている。

「ある形態」の自殺とは身体的自己破壊、精神的自己破壊などであるが、ラーマの場合は先輩格の吸血鬼ミートラに決闘を挑んで敗北することで吸血鬼の社会から疎外されてしまうという形で出来る。すなわち、ラーマの自己破壊は身体や精神ではなく社会的な意味合いで起きることが出来る。社会的な自殺とは、その社会における他者に承認されるアイデンティティの形成を自ら放棄することであるといえ、「存在論的病」を克服出来なかったラーマの、ある意味自然な帰結といえると考えられる。

したがって、ラーマの吸血鬼としてのアイデンティティ形成は結果的に失敗に終わったということが出来る。それは一つには、ミートラによって刷り込まれた「主人と従者」のメタファーに起因すると考えられる。

結果として彼は、「舌」と共生するという吸血鬼の本質を受け入れられなかったのであって、教授たちに期待されるような形で吸血鬼としてのアイデンティティを形成出来なかったのである。それはエリートとしての自身の自立性にあまりにもこだわり過ぎたからであるともいえる。

人間に本質的に備わっているとジラルがみなした「存在論的病」を指して、教授たちは「お前は人間のように考える」と批判していたと考えることが出来る。

ティムール・ノヴィコフと現代ペテルブルグ文化

松下隆志(京都大学非常勤講師)

ソ連崩壊後に流行したポストモダニズムは、90年代のロシアを象徴する一大文化潮流となった。しかし、ボリス・グロイスやミハイル・エプシテインの主張に顕著のように、ロシア版ポストモダニズムの理論はロシア文化全般というより、1970～80年代のモスクワの非公式文化——狭義においては「モスクワ・コンセプチュアリズム」——から決定的な影響を受けており、ロシア版のポストモダニズムはしばしばモスクワ・コンセプチュアリズムと同一視されることすらある。

とはいえそれは、同時代の他の都市にモスクワに匹敵する非公式文化が存在しなかったことを意味するものではない。たとえばレニングラードには、「ニュー・アーティスト」、「ミチキー」、「ネクロリアリズム」といった重要なグループや潮流が存在していた。さらに、ロックバンド「キノー」、セルゲイ・クリョーヒンの「ポップ・メハニカ」、映画『アッサ』(1987)など、今日のロシアのポップカルチャーに与えた影響という意味ではモスクワを凌ぐ面もある。言語や概念よりイメージを重視する反コンセプチュアリズム的な性格から今日に至るまで十分な研究が行われてきたとは言えず、本格的な研究が待たれている。

本報告では、現代ペテルブルグ文化研究の端緒として、ソ連で非公式芸術が発生した経緯とレニングラードの非公式芸術の歴史を振り返り、80～90年代のペテルブルグ芸術において中心的な役割を果たした芸術家ティムール・ノヴィコフ(1958–2002)の創作活動を概観した。

ソ連非公式芸術の誕生はフルシチョフのいわゆる「雪どけ」の時代に遡る。これは一時的にイデオロギーの締めつけが緩んだ時期であり、モスクワなどで公に西側の前衛芸術の展覧会が開かれた。ただし、こうした動きは必ずしも政権の体質が変化したということを示すわけではなく、「モスクワ美術の三十年展」(1962)におけるいわゆる「ロバの尻尾事件」をきっかけに前衛芸術は再び公式に禁止される。

レニングラードの地下芸術の始まりは、1948年にミハイル・ヴォイツェホフスキーという芸術家が創始した「赤貧画家団」だと言われる。ソ連の日常を政治的なフィルターを通して描いたモスクワの「リアノヴォ派」と異なり、「赤貧画家団」はより直接的に自分たちを取り巻く現実を写し取ろうとした。そして、「赤貧画家団」の中心人物だった画家アレクサンドル・アレフィエフは50年代末～60年代初頭にレニングラード初の非公式芸術グループ「アレフィエフ・サークル」を結成する。

その後もレニングラードの地下文化には、「ミチキー」、「ネクロリアリズム」などの重要なグループが生まれている。アレクセイ・ユルチャクはソ連のシステムの内部に暮らしながら、同時にシステムから見えない状態にある主体を「ヴニェ(外)」と呼んでいるが、あえてソヴィエト的日常に過剰なまでに同調してみせる彼らは、「ヴニェ」の自由の実践者であるとされる。

レニングラード非公式芸術の中心的存在として挙げられるのが、芸術家ティムール・ノヴィコフである。彼は幼い頃から芸術に親しみ、70年代後半に「年代記」グループに加わった後、それから分鉄する形で「ニュー・アー

ティスツ」(1982-1987)というグループを立ち上げた。メンバーはオレグ・コテリニコフ、イワン・ソトニコフ、ゲオルギー・グリヤノフ、セルゲイ・「アフリカ」・ブガーエフ、ワジム・オフチニコフ、エフゲーニー・コズロフ、キリル・ハザノヴィチ、アンドレイ・メドヴェージェフ、イナル・サフチェンコフ、エフゲーニー・ユフィット、ユーリー・クラセフ(コンパス)などで、1987年の展覧会では、ヴィクトル・ツオイやセルゲイ・クローヒンらを含む七十人以上もの芸術家が出展した。「ニュー・アーティスト」は音楽家をも含む多種多様な芸術家が参加する共同体であり、そこにはアヴァンギャルド画家ミハイル・ラリオーノフらが提唱した«Всёчество»の理念があった。

芸術家としてのノヴィコフの代表作は、「地平線」(1987-1989)と題された一連の作品である。ここでノヴィコフは質感や模様の異なる二枚の布地を縫い合わせ、結合部の縫い目を一種の意味論的な地平線(あるいは水平線)として利用している。そしてそこに、鹿、樹木、家、魚、船、飛行機といったオブジェクトを配置することによって、二枚の布地を独自の絵画空間として構築するのである。

アヴァンギャルドとの差別化を図ったモスクワ・コンセプチュアリズムとは異なり、レニングラードの非公式芸術はアヴァンギャルドの伝統を強く意識しており、それゆえに独自性が見えにくいことは否めない。しかし、上で述べたポップカルチャーへの影響をはじめとして、レニングラードの非公式芸術がポストソ連ロシア文化に与えた影響は大きく、さらに研究を進めていく意義があるだろう。

発表要旨「『白痴』における〈斬首の光景〉」¹

北井聡子(大阪大学)

ドストエフスキーの『白痴』には、切断された頭部の表象が何度か繰り返されている。一つ目は、ムイシュキン公爵が、かつてスイスで見たというギロチンの光景、二つ目はレーベジェフが祈りを捧げるデュ・バリー伯爵夫人の処刑の様子、そして三つ目はレーベジェフが、イヴォルギン将軍の無実を証明する為なら「自分の首を切断し、皿の上に載せることも厭わない」と誓う場面である。そしてこれらに、本研究ではナスターシャの肖像写真(頭部のイメージ)を加えた4つの〈斬首の光景〉を、ジュリア・クリステヴァのアブジェクション理論を用いて考察したものである。

周知のように切断された頭部は、精神分析においては去勢不安を表すものとして解釈されてきた。これに対し、クリステヴァは著書『斬首の光景』において「頭部崇拜は結局、二つの出来事の記憶をとどめるものであった。メラニコリーの源泉としての、母の原初的喪失、そして、父による去勢の脅威としての、男根的試練である」²と述べ、父に加え、母の喪失という意味をそこに読み込んでいる。即ち、西欧美術において無数に描かれてきた切断された頭部とは、人が成長過程で経験する原初の母(母なるもの)との分離と喪の記憶を留めるものとされる。そして数あるイメージの中で、クリステヴァが最も根源的なものと位置づけるのが、ギリシャ神話のメデューサの物語である。その眼差しによって見たものを石に変えてしまう恐ろしい怪物メデューサは、大きく開いた口と無数のうねうねとした蛇の髪を持つ。これが女性器を意味することは、フロイトは勿論、多くの人が指摘してきたところだ。では何故それは、かくも恐ろしい姿をし、また切断されねばならないのか、クリステヴァの解釈は次のようなものとなる。

前エディプス期とは、母子が未分化な全能の母への完全な依存状態である。そして人が主体として、記号体

¹ 本研究は、そもそも2013年夏に番場俊先生が東京大学で行った集中講義の課題として取り組んだものである。

² ジュリア・クリステヴァ(星埜守之、塚本昌則訳)『斬首の光景』みすず書房、2005年、26頁。

系へと旅立つには、息苦しくも安心感を与えてくれた原初の母を「おぞましきもの」として分離し、棄却しなければならぬ。メデューサの神話とは、この戦いの記録であり、即ち「主体もなく客体もなく、べとべとし、ねばねばしたもののおぞましき(アブ=ジェクト ab-ject 分離して、投げ出されたもの)以外の何ものでもない、あの古代の未分化状態を保持している原初の母として、メデューサは嫌忌すべきものなのだ。」³さて分離を果たした後、やがて原初の母の記憶は変容し、新たな意味を生成する場が現れることとなり、それは穏やかなイメージ(アイコン等)として表出される。しかし一方で、抑圧されたものは回帰し、戦いは繰り返されるものでもある。西欧絵画に溢れるサロメによる洗礼者ヨハネの斬首や、ホロフェルネスの首を切り落とすユディットといったイメージは、原初の母との融合状態へ引き戻す力に対する抵抗なのだ。

この議論を踏まえた上で『白痴』の斬首の光景を振り返った時、物語はムイシュキン公爵による、記号の世界(象徴体系)への旅立ちとして読むことが可能となる。彼はスイスでのギロチンの光景を恐怖と共に語ったが、ロシアに帰還した直後に対面したナスターシャの肖像写真には、恐れをいだきながらも、キスをすることになる。そう、まるでアイコンを眼差すかのように。ムイシュキンのアブジェクションは、進行しつつあった。ただし彼は単に、この世界へと参入したのではなく、世界を変容させようとしたことも忘れてはならない。これはつまり別の象徴体系を作り出す試みであったと言えるのではないか。しかし我々は、公爵の試みが失敗に終わったことも知っている。こうして、ナスターシャの顔は、アイコンからメデューサのように、激しく愛しながらも直視できない怖いものへと退行し、彼自身は再び「白痴」と呼ばれることとなるのだ。

ところで、上述のような解釈が成立したとして、以前、未解決の謎が残っていることを告白せねばならない。それは、冒頭で挙げたもう一つの斬首、つまりレーベジェフが「自分の首を切断し、皿に載せる」と誓う場面である。皿に載せられた首のイメージをサロメやユディットの姿に重ねること自体は、おそらく間違いではないだろう。とはいえ、注目してほしいのは、レーベジェフは誰の手も借りず、自ら去勢(首の切断)を「嬉々として」行っていること、さらに切り落としても彼は死ぬことがないということだ。言わばレーベジェフの斬首は、去勢不安、喪、恐怖とは無縁であり、クリステヴァの解釈をすり抜ける。この驚くべき斬首の光景をどのように解釈すべきか、この点については今後の課題としたい。

³ 同上、47頁。